

# 未来への架け橋 2001

—グローバル・パートナーシップ・スクール—

## 米日財団奨学寄附金プロジェクト

日本側代表：米川英樹（大阪教育大）

### 日本側コーディネータ

大阪教育大学 森田 英嗣  
広島大学教育学部 朝倉 淳 / 小篠 敏明  
鳴門教育大学 世羅 博昭 / 近森 憲助

アメリカ側代表：Don Spence（ECU）

### アメリカ側コーディネータ

イーストカロライナ大学 Helen Parke  
ノースカロライナ大学ウィルミントン校 Brad Walker  
ウェスタンカロライナ大学 Casey Hurley

## はじめに

### 1 2年目に入ったGPSプロジェクト

いつの頃からか、グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクトはその頭文字をとってGPSプロジェクトと呼ばれるようになった。2年目に入り、1年目のノウハウを得てGPSプロジェクトは順調に動くようになった。2年目に入ってからの変化は、日本側では、広島大学でコーディネーターが神山貴弥先生から朝倉 淳先生に替わったこと、鳴門教育大学でも小野由美子先生から世羅博昭先生に替わったことがあげられる。もっとも両大学とも、昨年度のコーディネーターである神山先生と小野先生はともに、これまでどおり中心メンバーとしてご活躍されたので、実質的には2人コーディネーター制とでもいうべき体制が整ったことがあげられる。さらに、広島大学では広島グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト研究会の会長である小篠敏明先生も大学全体のまとめ役としてコーディネーターに名を連ねられて朝倉先生とともに派遣教員と行動を共にされ、ご活躍いただいた。鳴門教育大学でも近森憲助先生がサブコーディネータとして鳴門地区の教員を率いてウェスタン地区に同行され、世羅先生と同様にご活躍いただくことになった。というわけで、広島大学と鳴門教育大学からはそれぞれ2人の大学教官が小・中・高の先生方のサポート役を務められた。さらに鳴門教育大学からは別件で滞米中であった小野由美子先生も駆けつけられ、派遣教員の指導にあたられた。

一方、アメリカ側にも役割交替があった。ウェスタンカロライナ大学のコーディネーターであったルイス・ペトロピッチ・ムワニキ先生は、ケイシー・ハーリ先生にその役を譲られた。ウェスタンカロライナ大学では当初からコーディネーターを交代制にすることをあらかじめ通告しており、予定の交替であったといえる。イーストカロライナ大学のヘレン・パーク先生、ノースカロライナ大学のブラッド・ウォーカー先生らは昨年度と同様にコーディネーターを勤めていただいた。

### 2 AACTEと日本教育大学協会における発表

さて、2年目になるとプロジェクトの成果を研究集会で発表するという新たな活動が加わった。アメリカ側ではそれはAACTE (American Association of Colleges for Teacher Education) 会議での発表であった。2000年2月29日にシカゴのChicago Hilton and Towersで8時15分から9時30分の1時間15分のプレゼンテーションと質疑応答が行われた。出席者は、スペンス先生が所属するECUの教育学部の学部長であるMarilyn A. Sheerer (ECU) 以下、Don Spence (ECU)、Helen Parke (ECU)、Brad Walker (UNCW)、Casey Hurley (WCU) の大学教官とMary Corbin (Wahl-Coats ES)、Lou Cannon (Hoggard HS) の教員が発表を行い、米川英樹 (大阪教育大学) が応答者として参加した。タイトルはExploring Educational Issues Through A Global Partnership であり、参加者よりも発表者の方が多いほどの「アットホーム」な雰囲気の中で、アメリカの教員が日本で何を見たのか、そしてこのようなプロジェクトの全体的な意味についての議論がなされた。

日本側でも同様な研究集会での発表が行われた。それは、2000年10月14日に大阪教育大学で行われた日本教育大学協会の研究集会においてである。米川英樹 (大阪教育大学)、森田英嗣 (大阪教育大学)、小野由美子 (鳴門教育大学) による発表であり、「グローバル・パートナーをめざす日米の学校間交流

「鏡に映った学校文化」というタイトルで、(1)プロジェクトの全体像、(2)日米の教師が相手国と学校へのパーセプションをどのように変化させたか、さらに(3)訪問の結果として自分の教育実践にどのように生かすに至ったかの3点から議論を展開した(内容については、日本教育大学協会『研究集会発表要旨集2000(平成12)年度』P.159-163を参照)。

### 3 アメリカの教員の受け入れ

アメリカ教員の日本での研修の全日程	
2000年	
6月18日(日)	アメリカを出発
6月19日(月)	成田経由で伊丹空港到着 ホテル・グリーンプラザ大阪に滞在
6月20日(火)	奈良観光
6月21日(水)	京都観光
6月22日(木)	広島観光
6月23日(金)	大阪、広島、鳴門に分散。大学での研修あるいは小・中・高の訪問
6月24日(土)	1日ホームステイ
6月26日(月)～30日(金)	学校訪問
7月1日(土)	大阪教育大学にてサマリーミーティング
7月2日(日)	伊丹空港から成田を経て帰国

第2回目のアメリカ側の教員団は2000年6月18日(土)にアメリカを立ち、大阪へは翌19日の夕方に到着した。昨年度とあまり変わらないが1日少ない日程であった。また、今年はホームステイが学校訪問に先立って行われた。到着して1週間経ってからようやく学校訪問が行われたことは昨年度と同様である。日本側の派遣教員は、現地に到着して2日後から学校訪問を行い、観光的なことは行う日程が取れないため、この点で日米で大きく異なっている。

各地のコーディネーターの方々の奮闘のおかげで、受け入れ側はかなりスムーズに役割を果たすようになってきた。昨年一度経験していることも大きいし、プロジェクトが米日財団によって認められてから2ヶ月後に第1陣の教師が派遣された昨年度と違って、時間的に準備の余裕があった。また、1年目には米国側は来日時においてさえ、全体の名簿が不十分であったが、2年目にはかなり改善され、日本側と同じような写真プロフィールも用意された。

アメリカの教員も現地の学校で、すでにアメリカに派遣された日本側の教員が熱心に対応してくれたためにリラックスして学校訪問が行われた。1週間の滞在を終えて、別れ際に日米双方の教員の間で別れを惜しむ涙が見られる場合も多かったようである。

7月1日(土)の大阪教育大学でのサマリーミーティングでは、米日財団の詫摩武雄氏と大阪教育大学学長の中谷 彪氏を迎えて、和気藹々で行われたことは印象深い。

#### 4 日本の教員のアメリカへの派遣

##### 日本の教員のアメリカでの研修の全日程

2001年

- 3月24日（金） 新大阪コロナホテルにて5時より直前研修
- 3月25日（土） 午前中は、直前研修の続き。午後、関空出発
- 3月25日（土）（現地時間）デトロイト経由で夜、それぞれのグループに分かれて以下の目的地に到着。
- 第1グループ ウェスタンカロライナ大学グループの宿泊地  
（空港：シャーロット、大学のバンにて移動）
- 第2グループ ノースカロライナ大学ウィルミントン校グループの宿泊地  
（空港：ローリー、大学のバンにて移動）
- 第3グループ イーストカロライナ大学グループの宿泊地  
（空港：ローリー、大学のバンにて移動）
- 3月26日（日） 市内見物
- 3月27日（月）～3月31日（金） 学校訪問
- 4月1日（土） 1日ホームステイ
- 4月2日（日） 全員ローリーへ移動。
- 4月3日（月） サマリーミーティングと協定の調印式およびレセプション  
（アメリカ側の教員やゲストも参加）
- 4月4日（火） イクスプローリス中学校およびイクスプローリス博物館訪問  
教育委員会および州議会の訪問
- 4月5日（水） ローリーから出発
- 4月6日（木） 夕方、関空到着

日本側のプロジェクト参加者は、2001年3月25日（金）と翌26日（土）午前の直前研修を経て、3月26日午後、関空から出発した。デトロイトまでは全員同じ行程であったが、そこからはシャーロットに向かう第1グループとローリーに向かう第2グループおよび第3グループに分かれて、それぞれその夜現地に到着した。今年度は、第1グループはもともと昨年どおりの計画であったシャーロットから飛行機を乗り換えてアッシュビルに到着するという計画を独自に変更し、シャーロットに到着、大学のバンでの移動ということに急遽変更することにしたため、直前になってから大学事務局に旅行日程の届け出の変更、運賃計算と支払い額の変更、航空会社にキャンセル料金の支払いを行わなければならない事態も生じた。1年目にシャーロットでの待ち時間が長すぎたために体調を崩した参加者もいたため、このような変更がなされたのであったが、ディレクターも承知しないうちにスケジュールが変更されたこともあって、ディレクターと第1グループの責任者との間で厳しいやりとりが行われたことも率直に記しておきたい。意見の相違もあったが、プロジェクトが成功するための真剣な取り組みの結果であった。第2グループも第3グループも現地に到着したのは、昨年ほどではないが、夜がかなり更けてからのこ

とであった。

3月27日(日)の1日市内観光あるいは休息の後、3月28日(月)から3月31日(火)の5日間は、日本側の教員は、パートナーである学校の授業に参加して観察記録をつけ、アメリカの教員にインタビューをし、時には授業を行うなど八面六臂の活躍であった。現地での日本の教員の具体的な活躍のほどは、この報告書の各人の報告部分に譲るが、昨年と同様あるいはそれを上回る大きな成果をあげた。その背景には、これまでアメリカ側の教員は2回来日していることもあり、現地の学校では、アメリカの学校では日本の教員を単なる客ではなく、パートナーとして遇することになってきたためであると思われる。交流の積み重ねがよりよい成果をあげるということはある意味で当然のことかもしれないが、あらためてグローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクトを通じての交流の「進化」が感じられた。さらに、今年度は、2年目ということで日本のディレクターは「目に見える」成果をあげてほしいと強く要望したこともあって、後述するように、多くの学校が交流協定を結ぶに至った。この交流は点と点ではなく、広さを持ち始めたことを認識したのは、州議会を訪問した時であった。我々日本側の訪問者が議会の開会に先立って紹介され、議員たちが立ち上がって拍手してくれたのには驚いた。州全体で、グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクトが認知されており、州民の代表者としての議会が友人として我々を遇してくれた瞬間であった。

## 5 協定締結校の飛躍的な増加

### 2001年度末までに交流協定を結んだ学校のリスト

#### 大阪側

- 1 三郷町立三郷北小学校 vs Wahl-Coats ES
- 2 大阪府立花園高等学校 vs Hoggard High School
- 3 高槻市立榎田小学校 vs Virginia Williamson ES

#### 鳴門側

- 1 鳴門教育大学附属小学校 vs Fairview ES
- 2 鳴門市立鳴門第一小学校 vs Cullowhee Valley ES
- 3 鳴門市立鳴門第二中学校 vs Rugby MS
- 4 鳴門市立里浦小学校 vs Cowee ES

#### 広島側

- 1 東広島市立御園宇小学校 vs Virginia Williamson ES
- 2 広島大学附属三原小学校 vs Wahl-Coats ES
- 3 広島大学附属東雲中学校 vs Exploris MS
- 4 広島附属三原中学校 vs Martin MS

さて、1年目を終わった段階では、三郷町立三郷北小学校とWahl-Coats ESおよび東広島市立御園生

小学校とバージニア・ウィリアムソン小学校の2つのペアのみが姉妹校提携を行っていたのであるが、2年目を終わった段階では、その数は飛躍的に増加し、前年度のものも含めると11のペアができあがった。このグローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクトをはじめたとき、私とスペンス先生との間では、3年間でそれぞれの地区で3校ずつ、計9校の学校のペアが協定を結ぶことを目標としていたのであるが、2年の間に11校となったわけであるから、より短期間で当初の目標を大きく超えることになったわけである。

ローリーで行われたサマリーミーティングでは、調印式の間を設定した。その場では計6組の調印が行われたが（その後、帰国後3組の追加調印があった）、それぞれの学校の代表者が壇上に登って、カメラのフラッシュがたかれ、拍手が鳴り続ける中で次々と調印がなされていったことは記憶に新しい。日本とアメリカの学校が互いに敬意をもってパートナーとなった学校と親密な関係を続けるという決意が表明されたのである。

## 6 今後の課題

さて、本プロジェクトは順調に推移しつつあるが、課題がないわけではない。

第1は、当初から目指していたことであるが、日常的な交流をいかに可能にしていくかである。これは技術的な部分とマンパワー的な部分に関わっている。たとえば、ある小学校で双方向テレビでの生徒の交流を考えたこともあったのであるが、どうしても時差が妨げとなって、ストップしたことがある。実際にはemailで交流する学校が多いかと思われるが、この場合は言語が障害となる。とくに小学校では交流を熱心に進めているところが多いものの、高校や中学の場合と違って、語学が堪能な教員が少なく、コミュニケーションに問題が生じる。これはもちろん、日本側だけの問題ではない。アメリカ側での問題でもある。それを解決するためには、マンパワーがどうしても必要かと考えられるが、その確保をどのようにするかが課題として残されている。アメリカでは最近日本からのボランティアがスクールインターンとして学校に配置される傾向がある。そのことによってかなり、障害は克服できる可能性もあるが、日本側でもマンパワーをいかに確保するかが課題であろう。

第2は予想以上に多くの学校がパートナーとなったのであるが、実際にはそれぞれの学校では温度差があり、すでに積極的に交流を進めている学校がある一方、調印を済ませても今後の計画が決まっていない、あるいはどのようにつきあいを深めればよいのかについてのアイデアが多くない学校も見かけられる。

国際交流は、それ自体が意味あるばかりではなく、最終的には子どもへの教育にその経験をいかに生かしていくか、あるいは子どもの教育にそれをいかに用いていくのかが重要であろうと思われる。第1段階では挨拶とお互いの学校の情報を多少交換し、「相手を知ろうとする段階」である。それが発展すると、学校の教師や生徒のパートナースクールに対する関心が高まり、複数のルートで交流が始まる段階に移行すると思われる。すなわち、「交流の幅がひろがる段階」である。これらの事柄はとても大事なことであり、教師にとっても生徒にとっても、このような経験を通じて国際感覚が養われるであろう。しかしながら、これらの段階に留まり続けていると人が代わり、年月が経つと交流が停滞し、やがて消えていくという可能性が高い。問題は、学校のカリキュラムの中で、このような交流関係がいかに組み込まれ、日常的な学習場面で、交流が生きたものになっていくのかであろう。つまり「カリキュラムに

組み込まれた交流の段階」である。その段階になったとき、真の意味で恒常的な日常レベルでの関係が可能であり、教員同士の横の繋がりと連帯感もてるのではないだろうか。本プロジェクトを通じて、そのレベルまで近づく学校をできるだけ増やしていきたいと思っている。

グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト

日本側代表・大阪教育大学教授 米川 英樹

# 目 次

はじめに ..... 大阪教育大学 教授 米川英樹

## ウェスタンカロライナ大学地域

平成13年度グローバル・パートナーシップ・スクールプロジェクト (GPSP) に参加して

鳴門地区・Western地区コーディネータ

..... 鳴門教育大学 教授 世羅博昭 ..... 1  
近森 憲助

日米間における学校教育が担う役割の違いについて

－WCU地区の学校と日本の学校との比較を通して－

..... 広島大学附属東雲小学校 教諭 川上 公範 ..... 4

学校と保護者との関係から見えてくる国際理解

－Fairview小学校の訪問を通して－ ..... 広島大学附属東雲小学校 教諭 川上 公範 ..... 8

アメリカの言語教育の実際と日米の比較

..... 鳴門市立第一小学校 教諭 藤本 景子 ..... 10

グローバルパートナーシップの展開

－Cullowhee Valley Schoolを尋ねて－ ..... 鳴門市立第一小学校 教諭 藤本 景子 ..... 14

グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト

米国現地研修ジャーナル (2001年3月25日－4月3日)

..... 鳴門市立第一小学校 教諭 藤本 景子 ..... 17

「Cullowhee Valley School」を訪れて ..... 鳴門市立第一小学校 教諭 山田美江子 ..... 31

アメリカ合衆国における社会科、ひいては総合的な学習に関する観察

..... 鳴門市立第一小学校 教諭 山田美江子 ..... 34

グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト

米国現地研修ジャーナル (2001年3月25日－4月6日)

..... 鳴門市立第一小学校 教諭 山田美江子 ..... 37



グローバル・パートナーシップの展開 -GPSPから遠隔交流学习への可能性を探る-	鳴門市立里浦小学校	教諭	香川	智	.....	53
ノースカロライナの理科教育及び子どもの自然に対する見方や考え方についての考察 -Cowee Elementary School訪問から-	鳴門市立里浦小学校	教諭	香川	智	.....	56
グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト 米国現地研修ジャーナル (2001年3月23日-4月5日)	鳴門市立里浦小学校	教諭	香川	智	.....	60
グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト 米国現地研修ジャーナル (2001年3月24日-4月5日)	鳴門市立明神小学校	教諭	上田	美織	.....	73
アメリカの教育から学んだ個別化学習を実践して -米国スコットクリーク小学校の訪問を通して-	鳴門市立明神小学校	教諭	上田	美織	.....	79
グローバル・パートナーシップの展開 -スコット・クリーク小学校の訪問を通して-	鳴門市立明神小学校	教諭	上田	美織	.....	82
グローバル・パートナーシップの展開 -鳴門市第二中学校とラグビーミドルスクールとの相互訪問を通して-	鳴門市第二中学校	教諭	高木	悦子	.....	84
グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト 米国現地研修ジャーナル (2001年3月23日-4月5日)	鳴門市第二中学校	教諭	高木	悦子	.....	91
日米の中学校における相互理解と生徒の自己表現力について -鳴門市第二中学校と米国ラグビーミドルスクールの比較を通して-	鳴門市第二中学校	教諭	高木	悦子	.....	105
グローバル・パートナーシップの展開 -Flat Rock Middle Schoolの訪問を通して-	鳴門市北灘中学校	教諭	森	義雄	.....	113
日米の学校における教育方法と環境教育〈実際と課題〉 -北灘中学校と米国の小学校・中学校・高等学校の比較を通して-	鳴門市北灘中学校	教諭	森	義雄	.....	117

グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト

米国現地研修ジャーナル (2001年3月23日-4月5日)

..... 鳴門市北灘中学校 教諭 森 義雄 ..... 122

グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト研究報告書

-日米の高校における学校教育の実際と課題-

..... 鳴門市立鳴門工業高校 教諭 塩田あかり ..... 135

国際理解教育の推進に向けて -タスコラ高校、チェロキー高校の訪問を通して-

..... 鳴門市立鳴門工業高校 教諭 塩田あかり ..... 138

ノースカロライナ大学ウィルミントン校地域

グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクトにおける

教員研修プログラムの実際と参加教員の「気づき」に関する考察

大阪地区・Wilmington地区コーディネータ

..... 大阪教育大学教育学部 助教授 森田 英嗣 ..... 140

グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト

米国現地研修ジャーナル (2001年3月24日-4月4日)

..... 高槻市立樫田小学校 教諭 毛利 貞喜 ..... 150

「総合的な学習の時間」における児童の自主性の尊重と教師の支援の関係

..... 高槻市立樫田小学校 教諭 毛利 貞喜 ..... 158

ノースカロライナの中学校に見る、日米のちがい

-グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクトに参加して-

..... 高槻市立第一中学校 教諭 守 きみよ ..... 162

ノースカロライナの教育改革の現場を見て

-グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクトに参加して-

..... 高槻市立第一中学校 教諭 守 きみよ ..... 167

グローバル・パートナーシップの展開

-バージニア・ウィリアムソン小学校の訪問を通して-

..... 富田林市立新堂小学校 教諭 幸道 典子 ..... 172

## 日米の小学校における音楽教育の実際と課題

ーバージニア・ウィリアムソン小学校の授業を参観してー

..... 富田林市立新堂小学校 教諭 幸道 典子 ..... 177

## グローバル・パートナーシップ・スクール研修に参加して

..... 八尾市立東中学校 教諭 石本 眞一 ..... 181

## グローバル・パートナーシップの展開

ーHoggard High School, Laney High School, New Hanover High Schoolの訪問を通してー

..... 大阪教育大学教育学部附属高等学校平野校舎 教諭 川井 悦子 ..... 185

## 本校ダンス授業の米国での反応と課題

ー大阪教育大学附属高等学校平野校舎と米国Hoggard High School, Laney High Schoolの比較を通してー ..... 大阪教育大学教育学部附属高等学校平野校舎 教諭 川井 悦子 ..... 187

## グローバル・パートナーシップの展開

ーJ. T. Hoggard High SchoolとE. A. Laney High Schoolの訪問を通してー

..... 大阪府立守口北高校 教諭 植田 玲子 ..... 190

## アメリカの高校を訪問してアメリカの高校と高校生の実情を知る

..... 大阪府立守口北高校 教諭 植田 玲子 ..... 192

## グローバル・パートナーシップの展開

ーヴァージニア・ウィリアムソン小学校の訪問を通してー

..... 東広島市立御園宇小学校 教諭 小池 周 ..... 198

## 小学校における国際理解教育のあり方

ー日本とアメリカにおける小学校の事例を通してー

..... 東広島市立御園宇小学校 教諭 小池 周 ..... 200

## イーストカロライナ大学地域

### 広島大学地区およびイーストカロライナ大学地区での活動と交流 (第2年次)

広島地区・ECU地区コーディネータ

..... 広島大学大学院教育学研究科 講師 朝倉 淳 ..... 204

グローバル・パートナーシップの展開

- －Whal Coats小学校の訪問を通して－ … 広島大学附属三原小学校 教諭 見藤 孝二 …… 208

日本とアメリカの情報教育（コンピュータ活用）の比較研究

- －アンケートをもとにした現状や意識の違い－

- …………… 広島大学附属三原小学校 教諭 見藤 孝二 …… 211

BRIDGING CULTURES

- －広島大学附属三原中学校とマーチン中学校に、文化の掛け橋を築くために－

- …………… 広島大学附属三原中学校 教諭 今川 卓爾 …… 223

スクールカウンセリングにおける教師とカウンセラーの連携

- －アメリカ・ノースカロライナ州の公立学校の事例に学ぶ－

- …………… 広島大学附属三原中学校 教諭 今川 卓爾 …… 229

グローバル・パートナーシップの展開

- －Exploris Middle Schoolを訪問して－ … 広島大学附属東雲中学校 教諭 三樹 正典 …… 233

日米の中学生における色の感じ方の比較研究

- －広島大学附属東雲中学校とExploris Middle Schoolの中学生の比較を通して－

- …………… 広島大学附属東雲中学校 教諭 三樹 正典 …… 237

パートナーシップづくりの展開

- －Rose High Schoolの訪問を通して－ … 広島県立祇園北高等学校 教諭 松崎 親男 …… 243

日米の高等学校におけるカリキュラム・授業評価方法・生徒指導・進路指導について

- －祇園北高等学校とRose High Schoolの比較を通して－

- …………… 広島県立祇園北高等学校 教諭 松崎 親男 …… 246

グローバル・パートナーシップの展開

- －ニューバーン・ハイスクールの訪問を通して－

- …………… 広島県立広島井口高等学校 教諭 西木 豊 …… 250

日米の高等学校における生徒指導の比較

- －広島井口高校とニューバーン・ハイスクール－

- …………… 広島県立広島井口高等学校 教諭 西木 豊 …… 253

三郷北小学校とウォールコート小学校の交流の実際と課題

ーウォールコート小学校の訪問を通してー

…………… 奈良県三郷町立三郷北小学校 教諭 小阪 昇 …… 259

特別な教育支援を必要とする児童への対応について

ー米国ウォールコート小学校の実践からー

…………… 奈良県三郷町立三郷北小学校 教諭 小阪 昇 …… 261

# 平成13年度グローバル・パートナーシップ・ スクールプロジェクト (GPSP) に参加して

鳴門地区・Western地区コーディネータ  
鳴門教育大学 教授 世羅博昭  
近森憲助

## はじめに

ノースカロライナは東西に広がる州である。鳴門地区はその西の端に位置するウェスタン・カロライナ大学を基幹大学としてその協力校と主に交流を行っている。平成13年度は、広島地区からの参加者、鳴門地区からの自費参加者を含む計7名の先生方とともに、キャラウィー地区とヘンダーソンビル・アッシュビル地区との二箇所に分かれて研修を行った。GPSPのようなプロジェクトにコーディネーターとしてかかわることはともに初めてであったため、どのような内容の仕事をすればよいのか、最初は皆目見当もつかなかった。しかし、参加された先生方はどなたも話しやすく前向きで、しかも意欲に満ちた方々ばかりだったので、それだけでもずいぶん救われた気持ちになった。結局最初の心配は杞憂となり、このプロジェクトへの参加を通じてわれわれはコーディネーターというものが、どのような役割を担っているのか、直感的にはあるが理解できたように思う。このことが、われわれにとっては今回GPSPにかかわったことによって得られた最大の成果である。

上にも述べたような地理的な理由から、世羅はキャラウィー地区、近森はヘンダーソンビル・アッシュビル地区に滞在し、学校訪問と授業観察、派遣教員の授業支援ならびに学校間の姉妹校提携に向けての話し合いを行った。以下、それぞれの地区での活動と感想を簡単に述べたい。

## 1. 活動報告

### オリエンテーション

3月24日に現地へ到着し、翌日、受け入れ側のウェスタン・カロライナ大学ロイス、ケーシー、及びマクギンティ各先生とのスケジュール確認を含めた懇談を行った。この日の午後には、ロイス先生も主催者側の一人である、子どもたちの美術展覧会の表彰式を見学した。この展覧会は大学が地域の学校と連携し、大学

の施設を使用して開催しているものである。ここには日本ではあまり見られない教員養成系大学と地域の学校との連携のあり方が示されているように思われ大変参考になった。夕方には、歓迎レセプションが湖畔の施設において行われ、最後は森先生、上田先生のリードで阿波踊りで盛り上がった。

翌25日にはフェアビュー小・中学校及びスモーキー・マウンテン高校を参加者全員とともに訪問した。フェアビューで印象的だったのは、優秀 (Academically gifted: AD) クラスである。エミリー・ディキンソンの詩を題材とした授業が展開されていた。少人数クラスで、非常に静かな品格さえ感じられる雰囲気がとても印象的であった。

高校での訪問を終えた後、近森、森、高木の3人はノースカロライナ大学アッシュビル校へ向かった。同校の大学院比較教育のクラスにゲストとして出席するためである。クラスには7～8名の現職教員が待ち受けており、日本の一クラスの生徒数、先生に対する社会や生徒の評価や態度など様々な質問を受けた。「スモーキー・マウンテン高校を訪問したとき生徒のマナーがとても良かった」との感想を漏らすと、全員が意外だという態度を示したのが印象的であった。

3月26日から29日までは、キャラウィー地区とヘンダーソンビルの二手に分かれて研修を行った。

### 【キャラウィー地区：世羅】

小学校3校、高校1校に分かれて研修するため、レンタカーを借りて毎日1校訪問することにした。鳴門地区から参加した教員はパートナーの先生とTTで授業をしたり、単独で日本文化に関する授業を行ったり、生徒からの質問に答えたりと、大変忙しい毎日であった。訪問した小学校はそれぞれ非常に個性的であった。机の配置も授業の仕方も多様で、日本の一斉教授に非常に近いものから、個別学習に近いものまである。ノースカロライナ州は80年代から教育改革の先頭を走ってきた州であり、学力テストの伸び率も全米一として注

目を集めている。州の政策を反映して、ある学校では主要教科重視、学力テスト結果重視が学校の最優先課題であることが傍目にも非常に明白だった。こうした政策の結果、学校によっては地区の財政状況ともあいまって、美術、音楽などの実技系の科目が削られるところもあるということだった。その一方で、保護者の理解と協力を得ながら、幼稚園から第8学年までが統一のテーマのもと、学校をあげて総合学習を展開している学校もあった。しかしどの学校も一学級の定員は20名前後で、一人一人が教師から十分な視線を受けながら学習に取り組んでいる。そして、学習の進度に応じた支援を得ているというのはうらやましい気がした。学力をテストするというのであれば、学習の機会を最大限に保障し、学習の可能性を最大限に発揮したその成果をテストすべきである。そのための種々の方策を州は実現しようとしていることも指摘しておく必要があるだろう。

高校はチェロキー・インディアン居住区にあるチェロキー高校であった。先に訪問したスモキー・マウンテン高校とはまったく異なった独特の雰囲気を出していた。授業で将来の夢を尋ねたが、教師に指名されなければ生徒は決して自分から答えようとはしないし、「わからない」と答えた者も多かった。失業、貧困、飲酒といった社会問題が深刻といわれるインディアン居住区にあっては、若者たちが自分たちの未来を描くことができないのだろうか。それともそれが彼らの文化なのだろうか。いずれにしてもこれまでアメリカの高校についてもっていたステレオタイプの印象が一気に崩れる思いであった。しかし、学校の雰囲気はそれぞれ異なっていたものの、日本人教員を歓迎する暖かい心が感じられたことは共通していた。

#### 〔ヘンダーソンビル地区：近森〕

火曜日から金曜日まで、この地区の二つの中学校に一名ずつ中学校の教員が訪問し、授業見学、授業実践及び交流を行うこととなっていた。英語の先生はコミュニケーションにはほとんど問題がなく、またしなやかな性格の持ち主でもあり、私は理科の先生の通訳として、もっぱらフラットロック中学校に通うこととなった。この中学校における授業実践の内容や交流については、鳴門市北灘中学校森義雄先生の報告を参照していただきたい。

このようなことから、ここでの私の役割は、森先生

の活動がスムーズに進行するよう彼と私たちの世話役であるリサ・グリーン先生やその他の中学校教職員との調整や連絡、授業において通訳をすること、北灘中学とフラットロックの姉妹校提携について校長とディスカッションすること及び毎晩夕食後宿舎において行う反省会で司会・通訳を務めることなどであった。

初日学校に着いたとき、まずびっくりしたのは私と森先生の名前が大きく書かれた歓迎のポスターが正面玄関に掲げられていたことである。また、最初の音楽の授業では、日米の音楽が生徒のバンド、音楽担当のブール先生の指揮により演奏されたことである。私たちも「さくらさくら」を日本語でうたい、その詞を漢字仮名交じり文で縦書きに黒板に書いて、生徒たちの歓迎に応えた。先生間のチームワークもよくとれていて、特別な時間割をいろいろと工夫しながら組んでいただき、森先生も私も気持ちよく仕事をする事ができた。森先生が段々となれてきて、コミュニケーションが二日目ぐらいからとれるようになってきたので、通訳としての出番が少なくなった。結局子どもの心をつかめるかどうかは、言葉の問題ではなく、プロの教師として、どれだけ誠実に場数を踏んできたかという経験と後はハートの問題である。言葉はともかくとして経験とハートは森先生にかなうはずもなく、木曜日以降は授業実践や見学時、生徒の質問や回答の通訳以外、私の出番はなくなってしまった。教師が伝えようと思えば、多少言葉が不自由でも生徒には、それがアメリカの子どもであろうが、日本の子どもであろうが伝わるものは伝わっていくのだと実感した。

移動手段の確保に問題があり結局ラグビー校には一度も行けずじまいとなってしまった。ラグビー校に配属された鳴門二中の高木悦子先生には申し訳ないことをしてしまったと反省している。しかし彼女の反省会での発言からすると、好奇心も旺盛で、いろいろなものを吸収してきた様子が窺えた。宿舎のオーナーが知り合いの新聞記者に連絡し、彼女の活動風景が生徒と共に新聞に掲載された。良い記念になったことと思う。最終日の金曜（30日）に北灘中学とフラットロックの交流協定締結についてパーカー校長と懇談し、メッセージをビデオに収録した。この件については、基本的合意は得られていて、現在調印まで後一步というところまで話が進んでいる。

### 3. おわりに

人間が必然性と可能性のなかで生きているように、教育においても地域や文化、自然などの相異にもかかわらず必然的に共通している部分と地域・文化・自然によって大きく異なっているものがある。どこの国においても、学校には教室があり、教師と子どもがいる。子どもは日頃見たこともない人間に恐れを感じることもなく近寄って行ってあれこれと話しかける。どの学校にも一人や二人は言葉さえ何とかなれば、世界中どこに行っても良い教師として活躍できる雰囲気を持たせている先生が必ずいる。どんな雰囲気かと問われれば、言葉では言い表せず「直観です」と答えるしかないのだが。

一方、アメリカの学校では、生徒が「そうじ」をしないこと、先生が教室を持っていて生徒が授業ごとに先生の教室にやってくること、職員室がないことなど、日本の学校とは随分違うところもある。このGPSPに参加することの意義は、このような同じところと違うところを実際に日本の教師が、その目で見、身体で感じることであるように思う。「世界中子どもはどこに行っても同じ」とはよく聞く言葉だが、それを目で身体で実感することこそ、教師にとって最も大切なことのように思う。今回コーディネーターとして、そのお手伝いできたことをとても幸せに思っている次第である。



# 日米間における学校教育が担う役割の違いについて

## －WCU地区の学校と日本の学校との比較を通して－

広島大学附属東雲小学校 教諭 川上公範

### (1) はじめに

私は、昨年（12年度）文部省教職員等中央研修講座に参加し、講師の先生方の講義を聴いたり、個人研修を進める中、「子供の天賦の才能の開花」という研究テーマを得た。その後、書物などの資料や実情に詳しい方に話を聞くなどして研究を進めてきたが、今度、アメリカ合衆国における教育の実情を自分の目、耳、いや全身で体験する機会を得て大変有意義なときを過ごすことができた。

### (2) 我国における学習へのモチベーションの変遷

明治の開国以後、約150年近くの時が経過したが、その間、戦争や経済状態（景気の動向）に変化があった。それにともない、教育界においても「学習へのモチベーション」に変化が起こった。それを大雑把ではあるが、世の中の状況と対応させてまとめると下のような表になる。

時代	学習へのモチベーション
明治開国後	立身出世（「仰げば尊し」の歌詞にある）
戦前・戦中	お国のため
戦後	高い学歴を求めて
バブル崩壊後	生涯学習（自己実現）

### (3) 日米間で学校教育が担う役割の違い

「天賦の才能の開花」は、生涯教育の核をなすものであるが、この研究テーマを持ち、アメリカ（WCU地区）の学校を視察していくうちに、日米間で「学校教育が担う役割」にはっきりとした違いがあることに気がついた。アメリカの学校で視察した内容と、それに対応する我国の内容を表にまとめた。

アメリカ	日本
① AG教育	生活集団と学習集団との同一
② 補修教育	
③ 学級のルールの徹底	朝の会・帰りの会 （話し合い活動）
④ 国歌斉唱	
⑤ 個別学習	一斉授業

※アメリカでの視察校

- ・ 3/26（月） Fairview E. S.  
Smoky Mountain H. S.
- ・ 3/27（火）
- ・ 3/28（水）
- ・ 3/30（金）
- ・ 3/29（木） Jonathan Vally E. S.

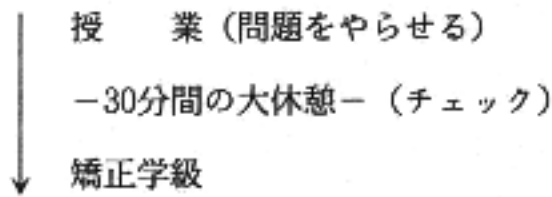
#### ① AG（ACADEMICALLY GIFTED）教育について

- ・ 3年生の終わりに行われる統一テストの成績などを基に、正式には4年生から編成。（成績が悪くなると認定を解かれる）
  - ・ 人数は、70～75名中、7名と約1割程度。
  - ・ AG（AIG）教育について郡での基準があり、AG教育の専門教師がおり、1人で数校を受け持っている。
  - ・ 教科は、国語・数学（理科も含む）
  - ・ 内容
    - 7年生（中2）で、高校レベルの「詩」の授業。（Fairview E. S.）
    - 高3で、学校指定の教科に合格し、担当教官の推薦があれば、大学レベルの内容の授業を履修し、成績優秀ならば大学での単位認定となる。（Smoky Mountain H. S.）
    - 4年生「環境問題」、5年生「ロードコースター（エネルギー保存の法則）」（Clyde E. S.）
    - 5年生「飛行機」（Jonathan Vally E. S.）
  - ・ 設定理由
    - 一般学級の授業内容では退屈する。
  - ・ 保護者の反応
    - 概ね理解されているが、やっかみもある。成績が悪く認定を解くときは、テストの点を示し、納得させる。
- #### ② 補修教育（Clyde E. S.）
- ・ 幼稚園（K1, 年中）（K2, 年長）において、毎年始めにテスト（トレース）を行ない、よく読めない子供に対して、親に手紙を出し教育を受けさ

せる許可をとる。

・低学年

午前中に30分間の大休憩があるが、その前の授業で問題をやらせ、大休憩にチェックし、できていない者は、大休憩後、矯正学級へ行かされる。



・高学年

例えば、算数などは、必ず午前と午後1回ずつあって、午前中の授業で問題をやらせ、チェックし、それを基に午後からの授業(矯正)に活かす。

・矯正学級(読み)について

レベルが14段階に分かれている。担当教官の前で一人ずつ本を読まされ、それぞれの子供の力や特徴を掴み、それに合った読物資料を与える。宿題に出される。

時間は、1週間5日で30~45分。9~18週

※その間、学級のほかの子供は、自由学習を行ない先に進むことはできない。

・設定理由

プログラム学習の流れを汲んでいると思われるが、過ちは、早く直す程よく直る。

・保護者の反応

小さいうちに問題が解決できれば、それが一番。そして、それを乗り越えたときの喜びは、大きい。両親は感謝しているらしい。

③ 学級のルールの徹底

どの学級においても、子供たちに対して、サッカーのイエローカードやレッドカードさながら、子供たちの生活状態を5段階の色別カードで表示している。これによって、状態の変更を求め、学級のルールを守る態度を身に付けさせようとしていた。

学級のルールを守ろう!

1. 優秀
2. 言葉による注意
3. 5~10分間廊下に出される。
4. 家庭へ連絡
5. 保護者が呼ばれ、校長室へ連れていかれる

内容的には、日本と変わらないが、学級の秩序を維

持しようとする姿勢が数段厳しいように思われた。

段階によってカードの色が違い、教室の壁に全員、名前とカードが張られている。

④ 国歌斉唱

日本では、儀式で「日の丸」を掲揚する、しないで、学校長が自殺する事件がおきたが、アメリカでは、教室には、必ず小さな「星条旗」が掲げられ、毎朝、授業が始まる前に、全員で胸に手を当て国歌を斉唱していた。

⑤ 個別学習

低学年の算数の「数と計算」の授業では、コンピュータが用いられていた。授業の様子は、子供一人ひとりがコンピュータと向き合い、コンピュータから出された問題の答えを打ち込むと言う形で進められていた。また、読書の時間においても、子供たちは、学年に配当された書物リストの中から読みたいものを選ぶが、読後、その本について、コンピュータから質問を受ける。それに応える形で読んだかどうかチェックされるのである。合格すると次の本へ進むことができる。

以上の5つの点について日米を比較すると、それぞれの国における「学校教育が担う役割」の違いが見えてくる。

アメリカにおいては、「子供一人ひとりの才能の開花」させる点である。そして、個性の尊重がうたわれる場合には、必ずセットとして重視されなければならないのが社会性であるが、その面は、毎朝の国歌斉唱や学級のルールの徹底といったところで養っているだろうと考えられる。

それに対して、日本は、少し暴言になるかも知れないが、教科の学力は二の次で、まずねらっているのは、社会性(社会感)であるように思える。しかし、社会性といっても、一人ひとりが参加して、集団を運営していくためにルールを遵守するというアメリカ型の社会性ではなく、日本型とは、例えば、学級には、成績の優秀な児童もいれば、苦手な児童もいるが、アメリカのように、その子が退屈するからとか、その子の才能を伸ばすためにAGクラスを編成するようなことはせず、同じ学級で学習・生活する。それが社会というものだという感覚を小さいうちから体にしみ込むまでわからせようとしているが、そういう意味での社会性である。それは、子供たちが大きくなって社会に出ても事情はなんら変わりはないからである。そんな集団

の中では、高い能力を有する子供は、自然と自分の能力を伸ばすことよりも苦手な子供を助けることに目が向いていくようになるがそれをねらっているのだと考えられる。

#### (4) それぞれの国の社会的背景・歴史性

当然のことではあるが、それぞれの国の学校教育が担う役割の違いは、その国の社会的背景や歴史性の違いから生まれ出るものである。そこで、これからアメリカの教育の良さを取り入れて日本の教育を発展させていくためには、両国の社会的な背景や歴史性を含めて考えていく必要があると思われる。そこで、アメリカの社会背景を先程述べた学校視察し捉えた特徴から考察してみる。

アメリカは、自由競争、契約の国である。競争は、まず、全員がスタートラインに着くことから始まる。そして、スタートし、競い合う過程においては、参加者全員がルールを遵守すること、つまり“フェア”であることが要求される。競争の結果、勝者と敗者が決定される。このように考えたのは、私が視察した学校では全員の子供に基礎学力を身に付けさせること(補修教育)に力を入れていたからである。これは、全員を同じスタートラインに着かせることを意味している。そして、学習を進めていくうち、高い能力を発揮したり、有している子供達に対し、AGクラスを編成し、飛び級や高校に在学しながら大学の単位取得認定制度などを保障している。

それに対して、日本では、規定の社会への帰属感(その集団を離れては、生きていかれない)が最優先される。古くから、「家制度」「村の共同体制度」、近代に入ってから「会社家族制度」といったものが見られた。その閉鎖性によって、公共性や“情けは人の為ならず”という諺にもあるように循環性(自然の法則も含めて)、道徳性が保たれてきた。そのため、我国では、規定のルールを守ること、母性原理による集団維持が大事にされてきたのだと考えられる。

#### (5) 今後の教育のあり方

今回の学習指導要領において、文部省は「生きる力」をキーワードとし、個性の尊重、そのための生涯学習(自己実現)を打ち出した。これは、マズローの発達段階からすると、最高位に位置するもので、日本の社会そして教育水準も最高位まで進んだと言うことであり、その点では、素晴らしいことであると思われる。しかし、気をつけなければならないのは、先で述べたように、それぞれの国によって歴史性や社会性が異なるので、個性の尊重(一人ひとりの才能の開花)の方法を、アメリカで行なわれている方法をそのまま持ち込んだのでは、いたずらに混乱を起こすばかりで、教育改革は失敗に終わらざるおえなくなるということである。

そこで、我が国の社会性・歴史性を踏まえ、生涯学習(自己実現)のための学校教育の全体構造のあり方について考えてみた。

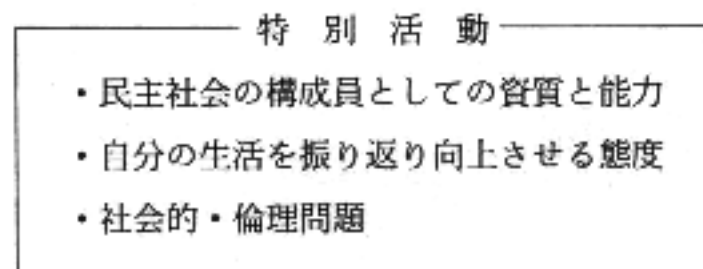
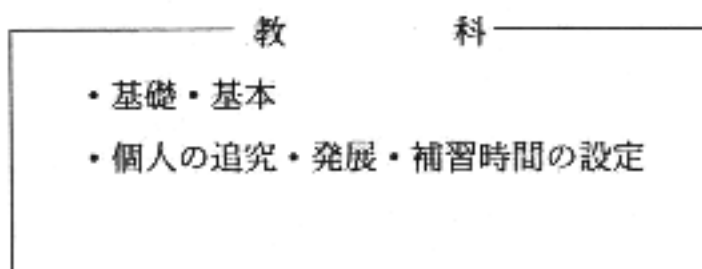
#### ◎教育目標

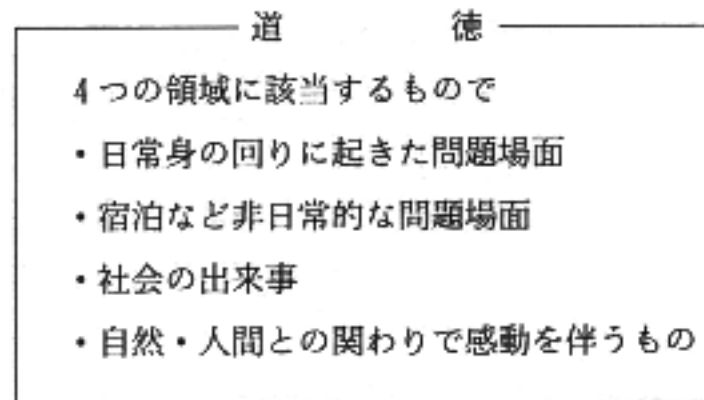
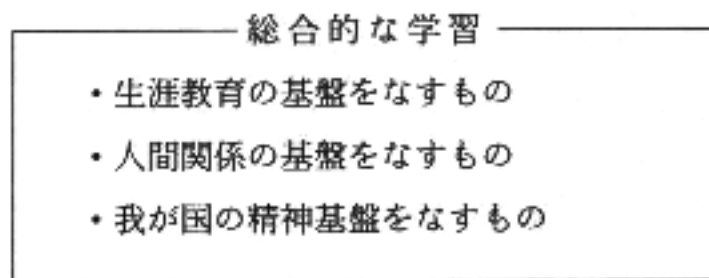
- あらゆる教育活動を通じて、子供一人ひとりに自分を振り返る力と、将来にわたって生涯学習を進めていくための基礎的な学力を身に付けさせる。(ここで、自分とは、個人としての自分と、集団の一員としての自分という面がある。)

生涯教育を推し進めて  
行くための力

- 学び続けたいもの(ライフワーク)をもつ
- 問題解決のための資料収集の方法を知る
- 情報を基に問題解決するための思考・判断力・技能を身に付ける

#### ◎カリキュラムの構成原理

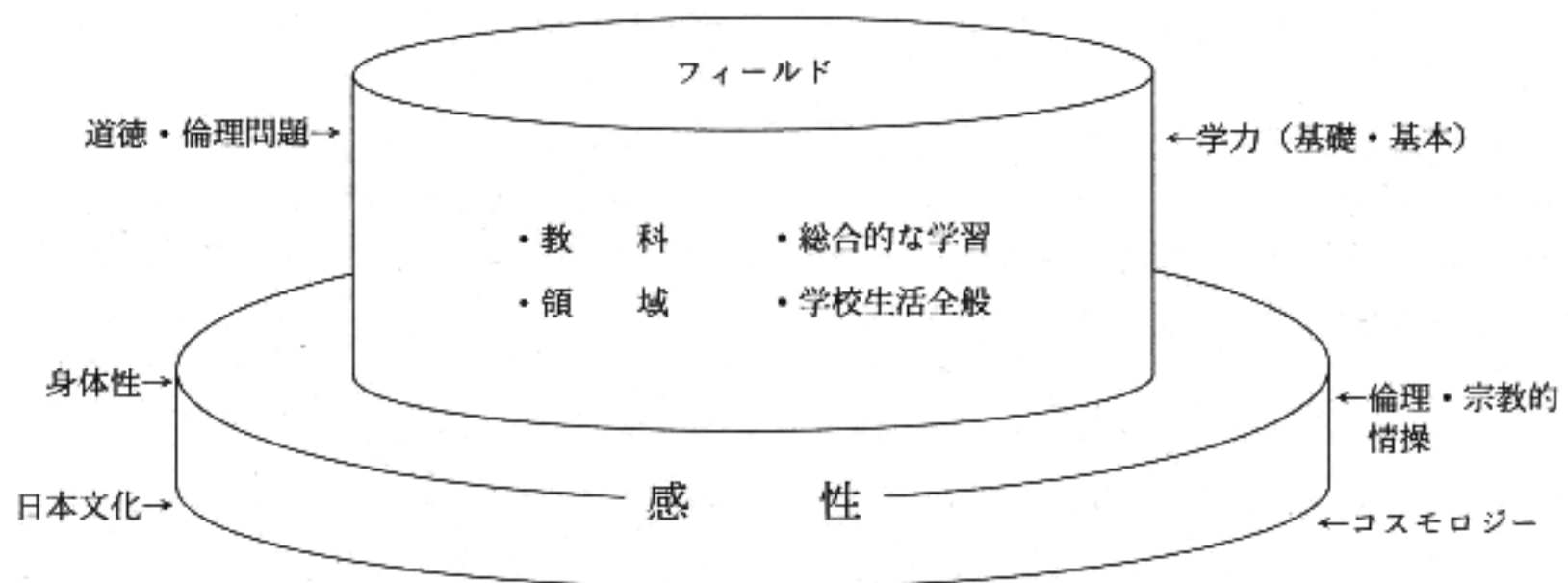
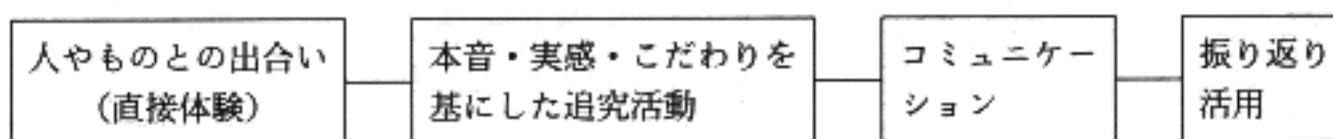




※個性を重視するだけ、社会性も重視する必要がある。そのため、宿泊学習、PAなど意識・無意識のレベルでの取り組みが大事である。

※学社融合を進めていく必要がある。

◎授業の構成原理



(6) おわりに

以上考察してきたように、今回の教育改革は、小手先の変更で実現されるものではなく、社会的な背景や歴史性、文化史、経済史、……等々を基にした策が講じられなければ失敗に終わるであろう。しかし、国民いや教師の中にさえも、この改革の重大性・深刻性が

十分に理解されていないようである。その中で、“新しい歴史の教科書”が物議を醸し出しているが、これまでのことを考えると、教育改革を深く捉えるための一つの試金石となるのではないかと思われる。教育活動が成功し、再び我国が活気を取り戻す日が来るように慎重に取り組んでいきたいと考える。

# 学校と保護者との関係から見えてくる国際理解

## —Fairview小学校の訪問を通して—

広島大学附属東雲小学校 教諭 川上公範

### (1) はじめに

PTA活動は、大きく2つに分けられる。その1つは、コーラス同好会や焼物同好会などに見られる、保護者が趣味をもち、伸ばす場の提供という面である。これは、活動を通して、保護者同士が親しくなり、連帯感が生まれるという効果が期待できる。もう一つは、交通指導当番とか校内整備作業など、子供たちが安全で楽しく学校生活を送れるようにするための、学校に対する側面的なバックアップという面である。

この度、アメリカ(WCU地区)の学校(Fairview校)を視察する機会を得て、学校(学校長)と保護者の関係のあり方について考察した。

### (2) 視察校(Fairview校)の実態

#### ① 校内の様子

Fairview校は、すべて1階建てであった。中央に円形の図書室があり、各学年部の教室がそこから放射線状に伸びていた。すばらしいのは、建物だけでなく学校の敷地内に小さな牧場があり、子供たちが牛や他の小動物などと親しめるようになっていた。更に、池には、水辺の動植物(昆虫も含む)や季節の渡り鳥が観察できるように、ビオトープが造られていた。すばらしい環境に感心しながら、中央の図書室から7年生の校舎へと向かって渡り廊下を進んでいると、コンクリートミキサー車が大きな音を立てて、作業をしていた。すると、校長が「うるさくて申し訳ない」と詫言ながらも、これは、保護者のボランティアだと説明してくれた。そして、少し誇らしく、先の牧場もビオトープも保護者のボランティアの協力があって完成させることができたことを説明してくれた。

#### ② 校長の学校運営について

Fairview校はもちろん、視察した全ての学校の校長は、管理者というより経営者といった感じであり、私たちに、学校の運営方針について、自信を持って熱く話してくれた。それを聞きながら、きっと自分の経営方針を保護者や地区の教育関係者に詳しく説明し、納得してもらっている結果が、保護者のボランティア

の姿になって現れていたのだろうと考えた。

### (3) 学校に戻って

アメリカでは、学校と地域とに垣根がないと言って良いほど、保護者が気楽に学校に来て、子供たちの前でボランティア活動をしていた。これがアメリカと日本を比べて、学校と保護者の関係の中で決定的に違うところだと感じた。

そこで、学校に帰って、子供たちが安全に楽しく学校生活を送るために保護者が陰で行なっているボランティア活動をどうにかして子供達に知らせることはできないものかと考え、ささやかではあるが実践を試みた。

私が、勤務している学校のPTA組織は、常任幹事会、文化部、生活部、保健部、そして、私が担当している施設部で構成されている。この部の内容は、運動会や文化展でのバザーとベルマーク活動である。

今年度初め、あるノート会社から手動と電動の鉛筆削りが、各1台ずつ送られてきた。その理由は、その会社の創立30周年行事として、その会社のベルマークをたくさん送ってきた学校に贈呈していたのであるが、本校がそれに該当したのである。ベルマーク1つ1つは、たいした額ではない。子供たちは、自分が使ったノートのベルマークを切り取っては学校に持ち寄り、保護者がそれを仕分けして送ったのであるが、この小さな努力の結果が、2台の鉛筆削りとなったのである。これを子供たちに知らせる必要があると思った。

また、今年度の役員の方が、今年度からベルマークの回収方法を変え、1人1人に回収袋を準備された。この作業も大変であったが、この作業についても子供たちに知らせなければならないと思った。

そこで、鉛筆削りの紹介と、回収袋の説明、そして作業風景をビデオに撮り、PTAの組織の説明とともに全校放送した。もちろん、ビデオに登場するのは、この部の役員の方である。これにより、子供たちが、小さなベルマーク1つ1つを大切にできるようになってくれるとともに、親と学校との一体感を感じとってくれることを期待している。

#### (4) おわりに (これからのPTA活動)

今度の教育改革で、学校評議員制度が導入される。これは、学校と地域との垣根を低くして、地域に開かれた学校にしようということがねらいである。この制度により、学校、特に校長は、地域に対して、経営理念を説明する義務を負う代わりに、理念実現のために、地域から協力が得られるというメリットも生まれる。これまで、何か協力したいのだけど、学校の中のことが分からないので活動できないということがあったが、これからはそのようなことがなくなるであろう。

PTA活動についても、これと同じ状態であったのではないかと思われる。学校のために何かしたいのだけれど、学校のことが分からないので活動できないといったことである。これからのPTA活動は、次の3つの内容から構成されると考える。

- PTA活動
  - 同好会的なもの
  - 環境整備的なもの
  - 学校の教育内容に対する支援的なもの

学校がPTAから支援を得るためには、更に突っ込んだ説明や情報公開が必要である。その意味から言うと、同好会的なものに入って、学校に足を踏み入れてもらうことも大切であるし、子供が生活する学校環境を知ってもらうことも不可欠である。しかし、これから重要になってくるのは、総合や教科の内容についての支援、つまり外部講師やアシスタント者としての授業参加である。これらは、すでに始められているが、今後更に推進していくために、学校の教育内容などの分かり易い説明が必要だと考える。

これからは、学校長は、どのような学校経営理念を持っているのかが問われるが、教師も内容の充実した授業をするための努力だけでなく、保護者や地域に向かって分かり易く説明していく努力が求められるようになると思う。

# アメリカの言語教育の実際と日米の比較

鳴門市立第一小学校 教諭 藤本 景子

## (1) はじめに

現在の教育では「生きる力」がキーワードとなっている。「生きる力」は国語科においては、言語生活を豊かにする力・言語文化を味わい創造する力・伝え合う力・情報を活用し産出する力・言語による思考力とされている。生きる力は外からの力で育てられるものではなく、子どもの中で育っていくものである。指導者は子どもが「育つ」ように学びの場を設け、意図的・計画的に指導・支援することが求められる。

アメリカではこれらの力をどのように育てているかを知るために、以下の点について研究を進めることにした。

## (2) 研究の概要

### ① 研究の目的

#### 1 日米の図書館教育の比較

一図書館（学校図書室）から情報センターへー  
従来の図書室は、書籍が中心であった。国語学習のための辞書・文学作品・理科や社会のための辞書や博物誌・伝記・科学読み物等の調べ学習のための書物の保管所の役割を果たしていたといえる。しかし、現在の社会的状況や学校現場の環境の変化から、図書室にはコンピューターや視聴覚教材を含めた情報センターとしての役割が求められるようになってきている。米国の学校図書室はどのような環境にあり、どのように運営されているかを視察・研修する。

#### 2 読書指導における教師の役割

現在の読書指導でよく行われているものとしては、推薦図書（例えば、その時の授業に合わせた作品を学級文庫として展示する）をもうけたり、読書カードの利用による読書の推進。教師による読み聞かせがある。また、読書タイム（テーマも何も決めず、ただ自分の読みたい本を読む時間）をもうけることもなされている。これには、リーディングリテラシーを伸ばす・知的好奇心を高める・集中力を高め精神の安定をもたらす等の報告もある。日本では児童の本離れが言われ初めて久しいが、米国の状況はどうであろうか。専門知

識を持つ者による個人の読書プログラムがあるとも聞くが、それはどのようなものだろうか。

### 3 言葉で伝え合う能力の育成

日本の国語教育は「話す・聞く」「書く」「読む」の3領域からなり、これらの力が現実の言語生活に活かされることを望んでいる。論理的思考を高めるため、説明的文章の比率も従来より高められた。「自分の考えを持ち、論理的に意見を述べる」ためにはコミュニケーション能力や情報を活用し産出する能力、言語による思考力が必要となってくるが、米国の児童はその能力が高いと考える。ディスカッションやディベート等、米国ではどのように授業に取り入れられ、その能力を高めるためにどのようなプログラムがとられているか（スキル等）の知識を得たい。

### 4 日本の文化を紹介する授業を通して、Cullowhee Valley Schoolとの交流を深める

同行の山田先生と二人で授業準備を行う。

#### 準備物1 日本の子どもの生活

ビデオ（学校生活、伝統行事・風景・武道）

#### "ITISYO-KIDS LIFE"

（パワー・ポイントとOHPシート・カラーコピーの3種で準備）

・平均的な小学生（高学年）の一日

・第一小学校児童へのアンケート

（学校生活の楽しみ、塾や習い事、お小遣い、学習時間、余暇の過ごし方）

#### 準備物2 日本の遊び

だるま落とし・けん玉・手合わせ・あやとり

折り紙・竹とんぼ（紙トンボ）は、生徒と制作もできるように準備

#### 準備物3 書道

色紙・掛け軸等のさくひん

半紙・水諾用紙・筆・墨汁等の制作準備

#### 準備物4 日本の民話や詩

浦島太郎 *Urashima Taro the Palace of the Dragon*

雪女 *The Snow Woman*

たにし長者 *My Snail, My Snail, My Husband*

ねずみの嫁入り *The Marriage of the Young Mouse Girl*

鶴女房 *The Story of White Crane*  
 まど みちお *The Animals*

② 現地調査の日程

日 時	場 所	内 容
3/26 (月) 9:00 13:00	Fairview Elementary School Smoky Mountain High School	授業参観と施設見学 米国の教師とのQ & A
3/27 (火) 7:30~15:30	Cullowhee Valley School	授業参観と施設見学 授業実践 (日本の文化) 教師・保護者との懇談会
3/28 (水) 7:30~15:30	Cullowhee Valley School	授業参観 授業実践 (書写) ASSEMBLY ジャクソン郡の教育長等との昼食会
3/28 (木) 7:30~15:30 17:00	Cullowhee Valley School Fairview Elementary School	授業参観 授業実践 (書写・折り紙) カリキュラム フェアを見学
3/29 (金) 7:30~13:00	.	授業参観・避難訓練 校長先生との懇談

\* 上表以外の日程は他参加者と同様なので、省略する。

(3) 研究の結果と考察

① アメリカの学校図書館と読書指導

私の見た学校は、Fairview Elementary School, Cullowhee Valley School, Smoky Mountain High School, Exploris Middle Schoolの4校である。その中でもFairview Elementary Schoolは、特に恵まれた環境にあった。メディアセンター(図書室)をハブ(中心)として、それを取り巻くように6個のポット(エンドウ豆のさや)といわれる円形の教室が配置されている。どの教室からもメディアセンターに行けるようにとの配慮である。そこには本だけではなく、教科書や生徒の作品も置かれており、製本の設備もあった。コンピューターも数多く設置され、情報収集の場となっていた。ノースカロライナ州では、生徒1人あたりの冊数は約10冊だが、ここでは規定の2倍に当たる16000冊の蔵書があった。専任司書の仕事は、本の整理・購入・管理と読書相談であり、プライバシー保護のため、読書の記録は取っていない。そのため、読書プログラムは存在せず、学年から比較して程度の低い本を選んでいられると思われる時指導するぐらいだという。

読書指導は国語(Reading)の時間に、担任教師によってなされることが多い。1年生の場合、Fairviewでは生徒各自が図書室で本を選び、教師の前で音読、その後本の内容について1対1でQ&A。そのときに言語発達についても観察し、必要なら言葉の教室において指導を受ける。クラス全体の前で音読し、みんなで話し合うときもある。Cullowheeでは教師が本を選び家庭へ持ち帰らせる。翌日教師の前で音読およびQ&A。4~5名のグループで話し合うことはあるが、全体での話し合いはない。読書指導や図書館の環境は学校によって異なり、統一された読書プログラムは存在しないことが分かった。

例えばFairview, Cullowhee, Smoky Mountainの図書室は、日本の地方図書館に匹敵するほどの規模のものだが、都市部にあるExploris Middle Schoolには学校図書館が存在せず、各教室に書棚があるのみであった。Explorisが博物館に隣接したチャータースクールであるとはいえ、学習に不自由はないのかと生徒に質問すると、本は十分だとの答えが返された。

郡部では、ほとんどの生徒がスクールバスで通って



いる。まとまった居住区というものはあまり存在せず、多くの生徒は広大な地域から集まってくる。つまり生徒にとっては家庭と学校が日常の生活圏となる。したがって文化的刺激を受ける場・情報収集の場というのは、多くは学校の役割にならざるを得ないのではないだろうか。それに反し、都市部の学校では近くに公立図書館や博物館などの施設が多数存在する。知識を得る場として、学校外の機関に多くを得ることができる。都市部・郡部に関係なく、等しく子どもに適切な知識を与えるために、郡部の学校の設備が整えられているとも考えられる。

## ② 言葉で伝え合う能力の育成

結論から言うと、アメリカでの授業観察では、ディベートや活発な話し合い活動というものを見ることができなかった。しかし母国語教育としてSpeakingを大事にしていることが分かった。アメリカは移民の国である。米語をしゃべれない生徒が入学したとき、「家庭が子どもに正しい知識を与えることができないなら、それを私たちが与える」とおっしゃった先生がいる。意志の疎通を図るためには、まず正確な米語を身につけてはならない。それはアメリカ国民としての自覚を促すことでもあるだろう。

Speakingの指導は保育活動の中にも取り入れられている。例えば保育所では朝の活動は出席の返事の後『私は〇〇で、〇〇をします。いいですか』と、みんなの前で先生に承諾を得ることから始まる。幼稚園では自分の作品をみんなに見てもらいたいとき、鈴を鳴らして注目を惹き『私は〇〇を作りました。見てください』と主張していた。1年生になるとReadingの指導として、教師と1対1での話し合いをするようになる。学年があがるにつれ、グループの話し合いや学級全体での話し合いが持たれるようになる。段階的に話す訓練をしているとも受け取ることができる。

私がディベートの授業を見ることができなかった原因を考えてみると、テーマ学習等多くの学習が、個人もしくはグループで持たれているためとも考えられる。例えば5年生ではカナダを知るというテーマでグループ学習がなされていたが、4～5人のグループでカナダを代表する人物（政治家・作家・歌手・スポーツ選手等）を選び、その人が活躍した時代背景（政治・文化・経済）や地域（地形・特産物・自然）について調べるといったものだった。この場合話し合いはグループ

中心となり、全体の前での発表となる。また Smoky Mountain High Schoolの国語の先生にお聞きしたところによると、国語も個人テーマの学習と教材を使っただけの学習がなされており、個人テーマは重なることがないようにされているそうである。生徒それぞれがインタビューし、情報を集め、まとめていく。その過程はポートフォリオにまとめられるが、ディスカッションの相手は常に教師である。1対1もしくはそのテーマに関係する教師と連絡を取って複数の教師とのディスカッションとなり、他の生徒と話し合うことはないそうである。

もちろん私が見たのはいくつかの学校での短い時間でのことであり、ディベートの盛んな学校もあるに違いない。今まで私は「言葉で伝え合う能力の育成」としてディベートに重要性を置いていたが、アメリカでの授業観察を通して情報収集能力や情報活用能力、論理的思考の育成の大切さも感じるようになった。正しいSpeakingたReadingのもとに正しいWritingがある。そして教師と個人的にディスカッションする時間が得られるということは、論理的思考や話す能力を高めるためにとても有益である。日本では、1年生から全体での活発な話し合い活動が持たれるが、もっと段階的な指導の必要性を考えさせられた。

## ③ 日本の文化を紹介する授業を通して

これは、パートナーシップの展開で記したことと重なるので、割愛する。

## ④ アメリカの出版物

図書室の管理者として、本の購入の責任者でもあるが、アメリカの出版物についても記しておきたい。アメリカの図書室や本屋をのぞいて驚いたのは、出版物の多様さである。例えばエリック・カールの同じ本がA4版・B5版・はがき版のハードカバー、読み聞かせ用の特大サイズ、教材用の汎用版と、内容や挿絵はすべて同じだが様々な大きさや装丁のものが出版されている。購入者は、その用途に応じて選ぶことができる。アメリカにも国語の教科書はあるが、Readingの授業では、多くの教師は教材となる本を自分で選んでいる。従って、同じ本を生徒数準備する必要があるが、そのときは安価な汎用版を選べばよいのである。

Readingの授業でCDブックを用いたものも見たが、日本のような朗読調ではなく、音楽付きのラップ調やロック調だったりした。1年生の生徒はCDにあわせて

本をめぐりながら、楽しそうに口ずさんでいた。コンピューターのソフト等の視聴覚教材を含め、教育環境が整備されていた。

#### (4) 今後の展望

アメリカの教育から感じたことは、個人指導による基礎基本の重視と知的好奇心を高める工夫である。そのため様々な教材が活用されたり、ゲームが取り入れられたりされている。今年は1年生の担任として何ができるかに、実験的に取り組んでいる。日本の実情では個人指導には限りがあるため、今はアニメーションを取り入れた授業を実践している。また段階的に国際理解を深めるため、エイゴリアンなどを参考として英語と日本語で自己紹介をしたり、『きらきらぼし』と『ABC』の歌を歌ったり、まど・みちおの詩を日英語で暗唱したりと、授業の中に自然に英語が入り込めるよ

うにしている。本格的な国際理解や国際交流に取り組める年齢ではないが、他文化を受け入れる下地を育てるのに早すぎることはない。各発達段階に応じたCullowhee Valley Schoolとの交流を実現させていきたいと考えている。

#### (5) おわりに

今回のプロジェクトに参加して一番有意義だったのは、私自身の意識の変化だったと思う。現実にアメリカの文化に触れ、アメリカの人々に接して、他文化を理解することの大切さを実感することができた。また私の英会話能力の不足から満足なコミュニケーションが取れなかったことによって、言葉（日本語・英語）の大切さを再認識することができた。様々な新しい視点を与えてくれた本プロジェクトに参加できたことを感謝する。